

大学生による地域連携の一事例

——中高生の居場所カフェの運営を通して——

栗原 ひとみ^[1], 金子 功一^[1]

[1] 植草学園大学発達教育学部

地域社会において大学機関の果たす役割は、学生、教員、職員、保護者、さらには大学の周辺に位置するステークホルダーにとっても益々重要な関心事となってきた。中央教育審議会答申（2005）の「我が国の高等教育の将来像」を端緒に大学の社会貢献の重要性が強調されている。このような大学教育改革を背景に、学生による地域社会における取り組みもまた具体的な実践が積み上げられている。各々の学生による実践は、全国的な傾向や潮流の中でどのように位置づけるかを明確化する必要がある。さらには今後の地域社会において、大学機関が果たす役割の改善に生かすためにも、客観的かつ包括的にデータを蓄積することが求められる。

千葉市にあるU大学のピアサークルは、令和4年度より「中高生の居場所カフェ」を運営し始めた。本報は、ピアサークルを中心として広がった学生達による地域連携の一事例を速報として報告するものである。

キーワード：大学生 地域連携 居場所カフェ

1. はじめに

文部科学省中央教育審議会答申（2005）の「我が国の高等教育の将来像」¹⁾において、国は、大学機関を「高等教育の中核としての大学」として位置づけ、その使命を大きく3つ示している。第1の使命は教育と研究であり、深い真理の追究である。これは本来的な使命である。第2の使命は全人的な発展の礎を築くためのものである。これは基本的特性である。第3の使命は大学の社会貢献である。大学における教育や研究それ自体が長期的観点からの社会貢献であるが、近年では、国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、直接的な貢献も求められるようになっており、いわば大学の「第3の使命」と捉えるべき時代となっていると考える。

激しく変化する社会における大学機能の再構築のため、文部科学省（2012）は大学改革プランを提唱した²⁾。その中で地域再生の核となる大学づくり（COC:Center of Community）を提案し、大学と地域

との連携強化、地域の課題解決への貢献等を記している。大学が組織的に地域と連携することで、大学のもつ様々な資源が有機的に結合され、課題解決に向けた教育研究活動が活性化する。大学が地域の課題を直視し、積極的に課題解決を目指す取り組みを国が支援することで、大学の地域貢献に対する意識が高まり、そのことで教育や研究機能がより強化される。また、地域課題に対する具体的な取り組みとして、大学生による地域の子ども達への支援も明記している。大学教育の質的転換という観点から、主体的に考える力をもった学生の人材の育成、地域課題の解決の中核となる大学の形成を提唱している。

さらに、文部科学省中央教育審議会答申（2012）の「新たなる未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」³⁾において、求められる学士課程教育の質的展開に向けた今後の具体的改革方策として、地域社会については次のように示されている。「学士課程教育はキャンパスの中だけで完結するも

のではなく、サービス・ラーニング、インターンシップ、社会体験活動や留学経験等は、学生の学修への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果をもつ」としている。学生が主体的に地域課題に取り組み、大学で学んできた専門知識を活用しながら、汎用的能力や社会貢献を行う社会体験活動は学士課程教育の観点からも推奨されている。

さらに、文部科学省（2013）では、「放課後支援の在り方に関する資料」⁴⁾を公表し、地域住民等の協力のもと実施する学習支援・体験活動を推奨した。学校と地域住民等が連携・協働して活動に関わることにより、地域全体で子どもたちの成長を支えていくための体制の構築が目指される。この体制の構築には、地域住民等の参画による放課後等の学修支援や体験活動として、大学生による進路相談も挙げられる。

そして、文部科学省中央教育審議会答申（2021）⁵⁾において、「大学は教育と研究を本来的使命としているが、同時に、大学に期待される役割も変化しつつあり、現代においては、大学の社会貢献(地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会貢献への寄与)の重要性が強調されるようになってきている」とし、大学の役割の変化を明記している。地域における大学はそれぞれの特色を発揮した教育サービスの提供の面だけでなく、地域社会の知識・文化の中核として、次世代に向けた地域活性化の拠点としての役割も担っていることに留意する必要がある。

2. 目的と方法

2.1 本報の目的と方法

大学の地域連携について、地域社会の知識・文化の中核として、及び次世代に向けた地域活性化の拠点としての役割が期待されている。地域拠点として位置づけられた社会貢献と同時に、地域の課題解決のための拠点としての機能を果たせるように求められている。

また、大学の学士課程教育において問題解決学習(Problem Based Learning)の重要性が再認識され、地域参加を通じた大学生の主体的な学びが推奨されている。従来であれば学内で学修に専念することが

求められた学生であるが、地域課題解決に取り組み社会人基礎力を補うために、学外での幅広い知識と能力を身につけることが期待されている。しかしながら、その実践事例は豊富に蓄積されているとはいえない。そこで本報では、学生が主体的に運営に取り組んでいるU大学「中高生の居場所カフェ」の活動を中心に、地域課題に取り組む実践事例を報告する。その報告方法として、以下の4視点からとする。

- 1 国における施策としての大学と地域との連携
- 2 U大学の学部概要
- 3 ピアサークル
- 4 中高生の居場所カフェの実践

2.2 倫理的配慮

本報の執筆にあたって、関係者全員に対して、研究の目的や方法を書面にて説明し、協力可能かの意思確認をした。団体又は個人の表記については、同意書を書面にて作成した。同意はいつでも撤回できること等を説明し倫理的配慮を行った。

3. 国による施策としての大学と地域との連携

3.1 内閣府の取り組み

内閣府（2013）は、子ども・若者白書において、子ども・若者の健やかな成長を社会全体で支えるための環境整備について提言している⁶⁾。中でも放課後子どもプランの推進として、中高生の放課後の居場所やさまざまな活動の場づくりを推奨している。この「居場所」という言葉について、住田（2003）⁷⁾は、「居場所」の構成条件として、子ども自身がその場所を「居場所」だと実感できる「主観的条件」と「客観的条件」に分けて、この主観性については「子ども自身がホッと安心できる、心が落ち着ける、そこに居る他者から受容され、肯定されていると実感できるような場所」であるとしている。客観性については「子どものありのままを、そこに居る他者が受け入れ、その子どもに共感的、同情的な理解を示しているという関係」がなければならないと指摘している。

さらに近年では、「子どもの居場所」といったように、集団を対象とする場の呼称としても使われる。

その場合には、孤立防止といった公共的機能を担う場という意味がある。内閣府(2016)は、子どもの居場所を家でも学校でもなく自分の居場所と思えるような場所と説明している⁸⁾。図1は、生きる力を育むモデル拠点事業を示している。そこには、生きる力育成プログラム(例)として「憧れとなるロールモデルの提示」として大学生や高校生との触れ合いが提案されている。なお、子供の生きる力を育むモデル拠点事業とは子どもたちの居場所となる拠点を整備し「生きる力」を育むプログラムを、地域を支援するスタッフが子どもたちに提供することを示唆する。

ルモデルの提示」として大学生や高校生との触れ合いが提案されている。なお、子供の生きる力を育むモデル拠点事業とは子どもたちの居場所となる拠点を整備し「生きる力」を育むプログラムを、地域を支援するスタッフが子どもたちに提供することを示唆する。

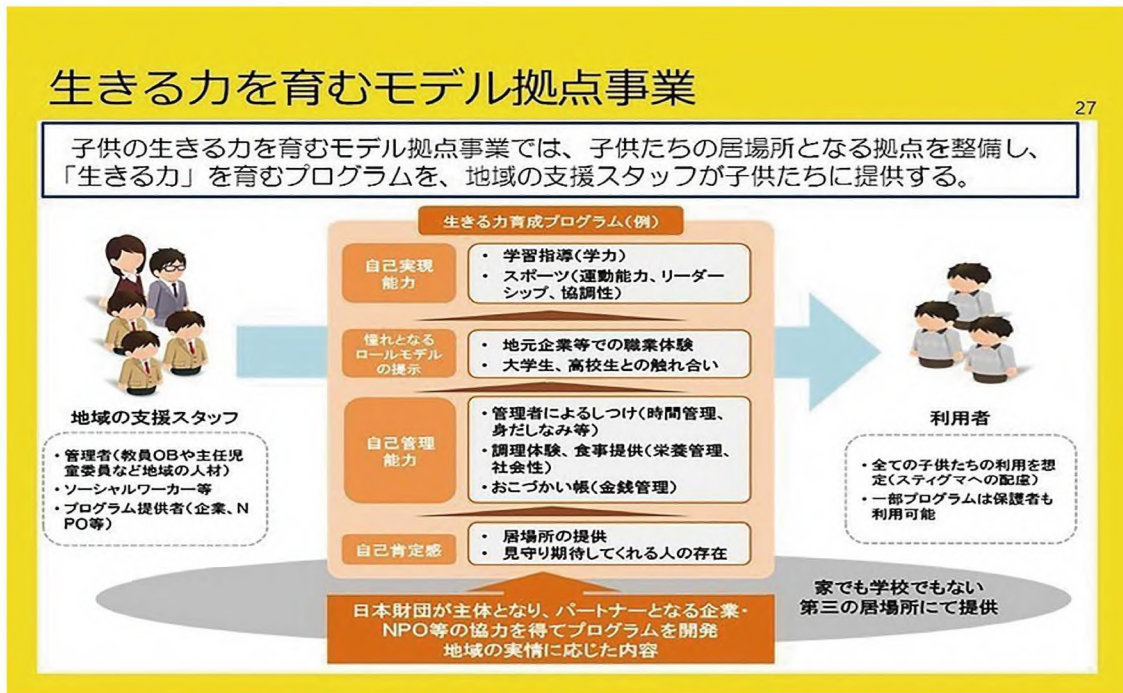


図1 「子供たちの居場所となる拠点を整備する」(「子供の未来応援基金生きる力を育むモデル拠点事業」説明図から引用)

3.2 文部科学省の取り組み

文部科学省(2012)は、子供・若者の居場所づくりに関する各種の取り組みを推進している⁹⁾。そこでは社会全体で子どもを育てて守るためには、親でも教師でもない第3者と子どもとの新しい関係「ナナメの関係」をつくるのが大切であるとしている。地域社会と協働し、学校内外で子どもが多くの人と接する機会を増やすことが重要であると明記している。加えて、大学で心理学等を学んでいる学生や、教員免許状を取得しているものの未だ教職に就いていない教員志望者等、子どもと比較的年齢が近い若者を子どもたちの相談相手として積極的に活用することが大切であると明記している。

文部科学省は、2020年2月28日から春季休業前まで、コロナ禍における全国一斉休校を実施した。その後、文部科学省(2020)は、「新型コロナウイルス感染症に対応した小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における教育活動の再開後の児童

生徒に対する生徒指導上の留意事項について(通知)¹⁰⁾を発令した。教育活動再開にあたり、コロナ禍における自殺予防、児童虐待等を予防する留意事項が示されている。この通知では、2020年8月に児童生徒の月別自殺者数が前年同月の2倍に増加していることを示している¹¹⁾。教育活動の再開の時期が地域によって不確定であることなどから、児童生徒の心が不安定になることが見込まれるため、学校として、保護者、地域住民、関係機関等と連携の上、教育活動再開後の児童生徒の自殺予防に向けた取り組みを積極的に実施することが求められた。

3.3 総務省の取り組み

総務省(2012)は、「域学連携」という地域づくりを打ち出した¹²⁾。総務省によれば、「域学連携」とは「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地

域の人材育成に資する活動」を意味する。過疎化や高齢化をはじめとして様々な課題を抱えている地域に若い人材が入り、住民とともに地域の課題解決や地域おこし活動を実施することは、都会の若者に地域への理解を促し、地域で活躍する人材を育成することにつながると考えられる。こうした取り組みは、地域（地方自治体）において、①大学で修得する知識や情報やノウハウが活かされる。②地域で不足する若い人材を活用できる。③地域が活性化する、といったメリットが挙げられている。大学（大学生・教員）のメリットは①学生や地域住民の人材育成ができる。②実践の場が得られる。③教育・研究活動へのフィードバックが得られる、などがメリットとして挙げられている。地域（地方自治体）及び大学、双方にメリットがあり、さらなる充実が望まれている。なお、総務省（2012）は国費事業による施策として、「域学連携」実践拠点形成モデル実証事業、「域学連携」地域活力創出モデル実証事業、「域学連携」地域づくり活動に対する特別交付税措置、等を実施している。

3.4 厚生労働省の取り組み

厚生労働省（2022）は、貧困の連鎖防止の観点から子どもの学習・生活支援事業を実施している¹³⁾。生活困窮世帯の子ども等を取り巻く主な課題として、生活面においては家庭に居場所がないことが指摘されている。こうした貧困の連鎖を防止する為に、生活保護受給世帯の子どもを含む生活困窮世帯の子どもを対象に実施するにあたり、各自治体の実情に応じて、創意工夫をこらして実施することが求められている。特に、生活習慣・育成環境の改善では次のような提案が為されている。①学校や家庭以外の居場所づくり、②生活習慣の形成・改善支援等である。特に地域（子ども食堂、企業、専門職等）においては居場所作りが求められている他、体験学習、保護者等への相談等と連携した子どもの学習・生活支援事業が求められている。

4 U大学の学部の概要

U大学は学園ビジョンとして、以下の内容を掲げている。1. 学生、生徒、園児一人ひとりの人間性

を大切にした教育を通じて、自立心と思いやりの心を育むことにより、誰をも優しく包み込む共生社会を実現する拠点となる。2. 地域社会における信頼を確かなものとし、安定的で特色ある教育機関としての地位を確立する。

また、共生社会を実現する拠点として地域社会に位置づく高等教育機関としての大学である。入学生は「誰かの役に立ちたい」等の志望動機をもち、共生社会の実現に寄与することを目指す学生が多く入学している。U大学の発達教育学部は、小学校教育専攻、特別支援教育専攻、幼児・保育専攻の3つの専攻で構成された教員・保育者養成校であり、それぞれの専攻の学生が互いに接続教育を学び合える特徴がある。ビジョン1で示した共生社会の実現をめざしているため、「誰かの役に立ちたい」等の志望動機をもち、福祉的マインド、教育的志向をもつ学生が多く入学してくる。3つの専攻学生140名が必修科目として「特別なニーズ教育の基礎と方法」を学ぶカリキュラムは他の大学に類をみない。学生の到達目標の1つは、「障害はないが特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難と対応を理解する」である。学生全員が上記の科目を学ぶことが、中高生の居場所カフェを運営する活動の背景として大きいのではないかと考える。

5. ピアサークルについて

5.1 U大学のピアサークル

「ピア」とは仲間という意味である。学友会組織に位置づく、U大学ピアサークルはボランティア活動を積極的に行っている。ピアサークルの基盤を築いた学生達は、サークル活動の趣旨を次のように語っている。

①「3年になるまで様々なボランティアをしてきた。けれど、そのボランティア体験内容を情報交換できる仕組みは学内にはなかった。どのボランティアが自分に合っているのか、自分のやりたいボランティアはどれなのか分からなかった。行ってみて「あ〜これじゃない、ちがう。」と分かったりした。事務的に記述されたボランティア募集情報をもてリアルな体験内容は見えなかった。体験内容の情報交換は友だちとの雑談に留まるもの

- だった。不便に感じていたので、自分がピアサークル部長になったら、サークルとしてボランティアに参加して、そのリアルなボランティア体験をサークルとして共有できる仕組みが作りたかった」。
- ②「1年入学した時に1人でボランティア参加するのは不安だった。ピアはサークルとして取り組んでいたのも興味をもった」。
- ③「バイト等で都合がつかないため欠席した時も次回のことは教えてもらわれて安心して参加できた」。
- ④「いろんな大人と話すことが今までなかったので新鮮で最初は緊張したけれどだんだん慣れてき

- た」。
- ⑤「子どもとかかわるボランティアがしたかったので、定期的にかかわることができ、その子どものことを知ることができるようになった」。
- ⑥「ピアサークルなので助け合うことができる。メンバーが気持ちよくボランティアできる」。
- コロナ禍（2020年度以降）から、サークル活動の自粛等を求められていたが、コロナ禍以前の活動実践例は以下の通りである（表1）。
- サークルとしての活動実績はコロナ禍に於いて2021年度迄自粛を求められていたが、部員数はコロナ禍以前よりもむしろ増えている（表2）。

表1 2018年度活動実績

学内活動		学外ボランティア	
4月	履修ガイダンス 履修登録サポート 新入生健康診断サポート サークル紹介 履修登録サポート フレッシュマンセミナー サポート	ゴールボール大会 手話勉強会 放課後子ども教室（継続） 障害者スポーツ指導員養成講習会（継続）	
5月		障害っ子も一緒のかけっこクラブ	
6月		子ども食堂（継続） 検見川浜ビーチフェスタ 子供向けプログラミング道場 車イスラグビー大会	
7月	前期試験対策勉強会 公開講座ピア・サポート研修会	子どものまちCBT 子ども食堂（継続）	
8月		障害者スポーツボッチャ講習 子ども食堂（継続）	
9月	公開講座 ピア・サポート研修会	ブラインドサッカーイベント	
10月	ピアヘルパー資格試験対策講座勉強会	学会学生交流会参加	
11月	緑栄祭 ボッチャ体験（〇〇市共同事業：232名）		
12月	ピアヘルパー資格試験受験サポート 学内避難訓練誘導サポート	パラスポーツ講習会	
1月	後期試験対策勉強会 ピア・サポート研修会インシデント入門	子ども食堂（継続）	
2月	予餞会 手伝い	地域団体・サークル実践報告会	

表2 ピアサークル部員数

年度	部員数	学年別			
		1年	2年	3年	4年
2018年	41人	28人	1人	4人	8人
2019年	43人	10人	28人	2人	4人
2020年	54人	14人	10人	28人	2人
2021年	65人	13人	14人	10人	28人
2022年	57人	20人	13人	14人	10人

5.2 「中高生の居場所カフェ」の運営に至る経緯

ピアサークルは、学生の声を受けて、ボランティア情報を交換できる仕組みを組織し、ボランティアを募集する地域団体と、参加する学生の双方との信頼関係を重視した。信頼関係が地域団体に波及的に広がり、中でも子ども食堂でのボランティアは参加人数、頻度が一番多かった。子ども食堂では、学生が小学生と一緒に遊んだり、食事を作ったり、料理を盛り付けたり等、一緒に触れ合う体験ボランティアを行った。その活動を約4年間継続して行ったことで、子ども食堂を2017年度から運営する地域団体の代表者である社会福祉士田中さんの信頼を得ることができ、今回の中高生の居場所カフェの運営につながった。

千葉県内の中高生の居場所事例は、他にもある。千葉市中央区きぼーるこども交流館、千葉市稲毛区

中高生放課後カフェ TonoRosso, 四街道市ぷらっと、四街道市らくまある等である。田村 (2014)¹⁴⁾ は千葉市の「こどもの居場所カフェ」についての運用において重要な役割を果たしたのは学生の存在であったとし、子どもたちは「いっしょに遊んでくれる」「話をしやすい」「話を聞いてくれる」などの学生との触れ合いだけでなく、学校とは異なる関係性を求めていると指摘している。

6. 中高生の居場所カフェの実践

6.1 中高生の居場所カフェ実践記録

2021年度の11月に始まり、ここまで自主事業説明会、意見交換会、打合せ会、プレオープンと、第1回から第3回迄実施されてきた。表3にその経緯を記録した。

表3 「中高生の居場所カフェ」実践記録

回	月日	場所	参加者	内容
自主事業説明会	2021/11/15	U大学 L棟講義室	・部員30人 ・社会福祉士田中さん ・植草学園大学教員1人	・子どもカフェ運営者かつ社会福祉士田中さんより植草学園大学のピアサークルに自主事業の説明会があった。
意見交換会	2022/1/17	都賀コミュニティセンター	・部長、副部長、会計部員学生3人 ・千葉市社会福祉協議会若葉区事務所CSW等2人 ・社会福祉士田中さん ・瀧澤学園教員1人 ・都賀コミュニティセンター1人 ・植草学園大学教員1人	・ステークホルダーとなる一同が千葉市若葉区の都賀コミュニティセンターに会い、意見交換を行った。その場で、小学生の居場所は子ども食堂を中心に充足しつつあることが説明された。しかし中高生の居場所が少ないことの説明があり、協働し合っていくことが話された。 ・次回までに活動名称や活動の概要・会場のレイアウト図案等を考えておくことが学生に告げられた。立ち上げメンバーで「自分達の居場所を自分達で作っているんだ」と中高生が感じられるようにサポートすることを共通理解した。 ・プレオープンを2022/4/20と決定。 ・社会福祉法人千葉市社会福祉協議会の令和4年度地域ふくし力アップ助成金申請を行うこととした。
打合せ会	2022/4/20	都賀コミュニティセンター	・部長、副部長、会計部員学生3人 ・社会福祉士田中さん ・瀧澤学園教員1人 ・都賀コミュニティセンター1人 ・植草学園大学教員1人	・学生は会場のレイアウト図案、当日スケジュール、準備するもの、チラシ案、周知方法と受付方法の提案を説明した。活動名称は「フリースペースW(わら)」と決定。 ・大学での案件は、授業科目「社会貢献・地域支援活動」の時数カウントの是非、実施日の日程調整であった。 ・レイアウト図案等は承認された。周知方法はLINE、公式Instagram、チラシで行うことになった。

プレオープン	2022/4/6	都賀コミュニティセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・部長, 副部長, 会計部員学生 10 人 ・千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 CSW 1 人 ・若葉区役所地域振興課 1 人 ・社会福祉士田中さん ・瀧澤学園教員 1 人 ・都賀コミュニティセンター 1 人 ・植草学園大学教員 1 人 	<ul style="list-style-type: none"> ・中高生の参加者 14 人。 ・ピアサークル部員 5 人であった。開室は午後 4 時～7 時迄。都賀コミュニティセンター集会室と大広間の 2 箇所使用して良いことになった。 ・集会室は個人, または複数で, 勉強や読書, 音楽鑑賞等をして過ごすスペース。大広間はカードゲームや雑談, ごろごろしたり, 漫画を読んだりして過ごすスペースとした。 ・当初の予想としては Wi-Fi が通じている集会室でスマホでゲームをする参加者が多いのではないかと予想したが, 実際には大広間で大学生とカードゲームや雑談をする参加者が多かった。
第 1 回	2022/5/18	都賀コミュニティセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・学生 7 人 ・千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 CSW 1 人 ・社会福祉士田中さん ・瀧澤学園教員 1 人 ・都賀コミュニティセンター 1 人 ・植草学園大学教員 1 人 	<ul style="list-style-type: none"> ・中高生の参加者 6 人 ・助成金申請書の作成において必要な書類を整備した。(事業計画書, 事業収支予算書, 事業全体収支予算書, 団体に関する調書, U 大学ピアサークル規約) ・現在の参加団体は以下である。U 大学ピアサークル, TSUGAno わ (子ども食堂), 学校法人瀧澤学園, 都賀コミュニティセンター, 千葉市社会福祉協議会若葉区事務所。
第 2 回	2022/6/8	都賀コミュニティセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・学生 8 人 ・千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 CSW 1 人 ・社会福祉士田中さん ・瀧澤学園教員 1 人 ・都賀コミュニティセンター 1 人 ・植草学園大学教員 1 人 	<ul style="list-style-type: none"> ・中高生の参加者 5 人 ・ちばし社協だより Vol.117 に活動が紹介される。地域の学生と連携して創る中高生の居場所カフェ「フリースペースW (わら)」が OPEN ! ・広報活動としてポストカードサイズの活動紹介を作成し, 道行く高校生に配布する予定であったが, 学生がその作成を忘れた。 ・地域課題である中高生の居場所カフェの参加希望者に情報が届かないということが何を意味するのかわかを田中さんより学生は指導を受ける。 ・集会室には毎回学生がホワイトボードに活動概要を告示する。学生の 1 人が「6 月は水無月」の意味 (水の無かった田んぼに水を注ぎ入れる頃) をイラストで描き, 基礎教養を中高生にさりげなく伝えた。
第 3 回	2022/7/13	都賀コミュニティセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・学生 12 人 (参加希望者が多い為, 中高生を圧迫しないよう大学生数を調整した) ・千葉市社会福祉協議会若葉区事務所 1 人 ・社会福祉士田中さん ・都賀コミュニティセンター 1 人 ・植草学園大学教員 1 人 	<ul style="list-style-type: none"> ・中高生の参加者 6 人 ・中高生が参加するまでの時間で何かできることがあるのではないかと。 ・大広間での活動は人気があったので, 皆でできる遊びがあったらと提案が為された。 ・毎回参加する中高生が居る一方で, 新規の参加者が増えていない。 ・田中さんより助言があり, 大学生が楽しそうにしていることが, 中高生に伝わっていくので, 楽しい企画をして楽しんでほしい。

6.2 助成金事業化

2022年4月、地域ふくし力アップ助成金を申請し、千葉市社会福祉協議会の助成金事業に選定された。活動資金を得ることができ、活動の充実や将来的な活動の可能性を広げる機会が得られたと考えられる。

6.3 新聞掲載

2022年4月20日プレオープンの日新聞社の取材があり、同年5月22日「中高生の居場所にU大学生らが千葉にコミュニティセンターW（わら）プレオープン」という見出しで、ネットニュースに取り上げられた。ピアサークルの学生代表がインタビューされた内容が掲載された。

6.4 実施状況と今後の課題

6.4.1 世代間ギャップ

学生もまた中高生と触れ合う体験に乏しいのではないかと考える。少し前の中高生時代の自分と、今、大学生として少し大人になった自分を同じ道程でつなぎたいのではないか。エリクソンは、心理社会的発達理論で青年期の課題をアイデンティティの獲得であるとした。自我同一性の獲得を目指す青年期の特徴がみられるのではないか。

また活動場所の集会室は、Wi-Fi環境が整備されている。そのため中高生は、その集会室ではスマホなどを使用するのではないかと学生の当初の予想を覆して、実際には、中高生は、学生が多く居たWi-Fiがつながりにくい大広間での滞在時間が長かった。学生も中高生も、直接会話することでお互いを分かり合う機会になったと考える。

6.4.2 地域交流

活動場所は、千葉市若葉区の都賀コミュニティセンターで行っている。JR都賀駅より徒歩6分という立地で利用者は多い。サークル活動団体は110団体がエントリーしており、活気がある。しかしながら、その利用者年齢層は高齢者が多い。大学生が入りすることで、高齢利用者が声を掛けてくれたりする中で、日常的な触れ合いがもたらされた。その波及的効果により、学生は「第37回都賀コミュニティまつり」のボランティアを行うことになった。

テントを張る作業や備品（机や椅子）の運搬・撤収作業は高齢者には厳しい面がある。このボランティアでは、多くのU大学の学生が率先して応募し、手伝った。

6.4.3 学生の参加者数の増加要因

①社会貢献・地域支援活動

コロナ禍でボランティア活動が自粛された令和2年度を経て、少しずつ全国的にもボランティア活動が蔓延状況に鑑みながらも、慎重に再開されつつある。その中で、学生は体験活動を欲していたのではないか。またU大学は、教員・保育者希望者に、「社会貢献・地域支援活動」を必修科目として位置づけている。一定時数のボランティア活動を行うことで単位が認定される科目である。その科目の単位認定を目指す意味もあるだろう。

②ボランティア体験の手頃さ

特段の知識・技術を求められる活動ではなく、その居場所に居ればよい。その居場所で楽しく過ごせば良いという当該ボランティア体験の手頃さが、応募の多さにつながったと考えられる。

③将来の職業に活かせる

参加学生はほぼ全員が将来、教員・保育者を目指す学生である。中高生と関わることは、職業理解や職業選択に活かせる活動だったのではないか。

④誰かの役に立ちたいという願い

職業といった概念に結びつかずとも誰かの役に立ちたい願いが充足できる活動だったのではないか。

⑤友達と一緒に参加できる

1人でボランティアするのは心細いが、友達と一緒になら、サークル仲間となら、参加してみたいという安心感があつたのではないか。

⑥立地の良さ

ボランティア活動を行うにあたっては、ボランティア場所までの交通費を要する。ボランティア活動事体は無償であるため、交通費は出費せざるを得ない。その点、都賀コミュニティセンターは、JR都賀駅を利用する学生にとって定期券利用内の場所である。交通費が不要であることも、多く

の参加につながったのではないか。

⑦信頼できる大人の存在

子ども食堂を運営している社会福祉士田中さんに対して、学生は大きな信頼を寄せている。それは先輩達から受け継がれた情報であったり、直接お話ししたり、かかわったりすることで信頼を感じたと推測される。親でも教員でもない、第3者の大人との信頼関係に基づいた活動は、その人物が憧れや目標となり、活動を通して自分を成長させてくれると感じたのではないか。

6.4.4 専門家と地域のリーダー

①専門家の存在

今回の中高生の居場所カフェでは、千葉市社会福祉協議会のCSW(コミュニティソーシャルワーカーの略)が初回から立ち合い、さりげなく助言した。専門家の温かいサポートがあったことは学生に安心感をもたらした。

②憧れるリーダーの存在

自主事業として学生に提案してくれた社会福祉士田中さんとサークルの学生との間でプラスの活動サイクルが展開された。そのため、なぜそのように展開したのかを考察したい。特に社会福祉士田中さんが、学生の様子を見ながら、どのように活動への意欲を引き出しているかといったコミュニケーションの取り方に注目したい。

場面1

広報活動の一環として名刺サイズのチラシを作成することになっていた。このチラシは、会場であるコミュニティセンターの前を、多くの中高生が通るので、それを手渡しして、PRするためのものとして考えられていた。しかし、どの学生も作成してこなかった。その時に田中さんが携帯メールを見せながら学生に伝えた。ある中学生に今日居場所カフェを行っていることを連絡すると、「今日だったんですか。残念」という首をがっくりうなだれてひざまずいている絵文字入りで返事が返ってきた。このように広報活動で救える中学生がいるのに準備をしてこなかったのは残念であると学生に告げた。学生がやるべきことを行わなかったという現実が、中学生をがっかりさせてしまった。現実と対峙する責

任と同時に、学生自身が作成してこなかった事実が現実と呼応しているという感覚をもったのではないか。

場面2

学習室には大きなホワイトボードがある。そこには、早く来た学生が、落書き風に本日の活動の予定等を書いてその日に来る中高生に伝えている。イラストや漫画タッチで思い思いに書き足して、1枚のホワイトボードを仕上げている。その中である学生が、6月なので水無月のいわれについて、文章とイラストで示した。それを見た社会福祉士の田中さんが、さりげなく、「とてもいいね。大学生としての知識を伝えているね」とおっしゃった。書いた学生は、何気なく書いたことについて褒めてもらえたことに驚いた様子であった。周りの他の学生たちは、そのやり取りを静かに聞いていた。そして書いたイラストは改めて皆が見直すことになった。田中さんの言ったことを、そのまま受け取るというよりは、どのようにしたらもっと中高生に自分たちを感じてもらえるのか、自分たちがどのようなことを伝えと良いのかを工夫していくことにつながったのではないか。

場面3

活動後のミーティングにおいて、田中さんは「早く来てくれた1年生の学生さんは、自分たちで遊んで欲しいんだよね。大学生が遊んでいて楽しそうだなと思えるところに中高生は入るから」と伝えた。

1年生の学生は、緊張していたので、次回からはその緊張をほぐす意味でも、早くから来て楽しんでいようと考えたのではないか。それを聞いていた周りの上級生は、後輩を指導する時にこのようなアドバイスをすれば良いという助言の仕方を学んだのではないだろうか。

6.4.5 専門家のコミュニケーション力

上記の3つの場面から見えてくる社会福祉士の田中さんのコミュニケーションの取り方は以下のような意図に基づいていると考えられる。

1) 事実を知らせる

学生に自分の考えを押し付けるのではなく、学生

が見えていない事実を伝えることによって、学生が実際の事実から考えて行動していく。行動によって事実にどんな変化があり、その変化から自分の行動を変えていくという、自分の行動の変化と方向づけを意識することによって、学生の効力感を高めているのではないか。

2) 触媒としての役割を果たす

目の前にいる学生だけではなく、それを聞いている学生も意識して言葉を伝えている。学生間で自分の発言後には、どのようなやりとりがなされるかを考え、グループダイナミクスとそれ以降の展開を視野に入れながらコミュニケーションを取っているのではないか。田中さんは学生と学生の中の触媒に徹しているのではないか。

3) 中長期的見通しをもつ

学生1人1人の経験の蓄積、集団としての成長を意識しながら、個々の場面でのコミュニケーション内容を判断していると考えられる。はじめに学生に接した時、3ヶ月後、6ヶ月後、9ヶ月後の個人と集団の成熟度を見極めながら、発言内容や役割を考えている。中長期的な見通しをもったかわりを実践しているのではないだろうか。

田中さんは、上記のように推察される意図について、ご自分の経験から体得し、周りを見ながらそれに合わせてコミュニケーションの取り方を調整している。田中さんのような働きをしている地域のリーダー的存在の方々はその地域の地域で、日常的に活動している。このような方々のコミュニケーション特性や行動の指向性などを分析していくことによって、有効な地域リーダーのより具体的な知見を明らかにすることができるように考えられる。

今後は、社会福祉士田中さんへのインタビュー調査を実施するなど、さらに当該活動の意義を探求していきたい。

謝辞

本研究にご協力下さいました社会福祉士の田中さん、千葉市社会福祉協議会、ピアサークルの学生、学校法人植草学園の関係各位、皆様に厚く感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 文部科学省. 我が国の高等教育の将来像 中央教育審議会答申. 2005 平成 17 年 1 月 28 日
- 2) 文部科学省. 大学改革実行プラン：社会の変化のエンジンとなる大学づくり. 2012 平成 24 年 6 月
- 3) 文部科学省. 新たなる未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ. 中央教育審議会答申. 2012 平成 24 年 8 月 28 日
- 4) 文部科学省. 地域住民参画による放課後等の学習支援・体験活動. 2013
- 5) 文部科学省. 中央教育審議会答申「これからの時代の地域における大学の在り方について」地域の活性化と地域の中核としての大学の実現（審議まとめ）. 2021
- 6) 内閣府. 平成 25 年版 子ども・若者白書（概要版）第 4 章子ども・若者の健やかな成長を社会全体で支えるための環境整備. 2013
- 7) 住田正樹. 子どもたちの「居場所」と対人的世界, 住田正樹, 南博文編著 九州大学出版会. 2003 ; 3-20
- 8) 内閣府. 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）子どもの貧困対策担当関係. 2016
- 9) 文部科学省. 国立教育政策研究所「絆づくり」と「居場所づくり」. 2012
- 10) 文部科学省. 新型コロナウイルス感染症に対応した小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における教育活動の再開後の児童生徒に対する生徒指導上の留意事項について（通知）. 2020
- 11) 文部科学省. コロナ禍における児童生徒の自殺の現状と対策について 文部科学省児童生徒課. 2020
- 12) 総務省. 地域力の創造・地方の再生「域学連携」地域づくり活動. 2012
- 13) 厚生労働省. 貧困の連鎖防止（子どもの学習・生活支援事業について）. 2022
- 14) 田村光子. 千葉市における子どもの居場所「こどもカフェ」の展開：子ども施策における大学参画の意義 千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 169. 2014 ; 3-13

Abstract

A Case of Community Collaboration by University Students “Through the operation of middle and high school students' whereabouts cafe”

Hitomi KURIHARA^[1], Kouichi KANEKO^[1]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

The role of university institutions in the local community is becoming an increasingly important concern for students, faculty, staff, guarantors who pay tuition, and university stakeholders. The importance of a university's social contribution has been discussed and was triggered by a Central Council for Education report titled, “A Future Vision for Higher Education in Japan” in 2005. Encouraged by these types of university education reforms, a growing number of students are becoming engaged in activities in their local communities. There is a need to clarify where these student activities exist within national trends. In addition, objective and comprehensive data are needed to help improve the roles played by universities in the local community.

In the 2022 year, the peer circle at University U in Chiba city started a café for middle and high school students as a place where they can feel a sense of belonging. Here, we provide a study report on this example of community collaboration by university students whose activities have spread with peer circles as the core.

Keywords: University Students, Community Collaboration, whereabouts cafe